

『幼学指南鈔』と類書 —中国文化受容の一つのかたち—

京都大学大学院文学研究科 研修員 中 島 貴 奈

二〇〇二年三月、本図書館蔵の『幼学指南鈔』（4-85 ヨ1貴 粘葉装、漉返紙雲母引料紙、押界（天二地一）を施す）が重要文化財に指定された。本書は平安末期に邦人の手により編纂された類書であり、現存するのは一種の古抄本のみである。本来は三十巻に目録一卷を添えた全三十一冊であったと推測されるものの現在では目録を含む八巻は失われ、残りは諸家の分蔵するところとなっている。

そもそも本図書館蔵の二巻、巻七（人部一・二）と巻二十二（巧藝部下、方術部、火部下）は、長い間「並河家旧蔵」とされるのみでその所在の知られていなかった巻であり、興膳宏国立博物館館長（調査当時文学部教授）・木津祐子助教授（文学部中国語学中国文学研究室）が一九九三年度の学内特定研究の一環として行われた「京都大学附属図書館所蔵貴重漢籍抄本調査」作業のなかで見出されたものである。当時は虫損がひどくあまりかえりみられていない状態であったが、阿部隆一氏による、その価値を伝えるメモが挟まれていたことから注目され、故宮博物院や大東急記念文庫蔵本の影印本との比較などを経て確認されるに至ったという。本書は既に図書館ホームページの電子化画像によってその全体を見ることが可能であるが、この十一月〈中国文化の受容〉というテーマで開催される図書館の展示会に出品される予定であり、実物を目にすることができそうである。

多くの書籍から語彙や成句等を抄出し、それらをさらに類別・分別して一覧化を図ることで利用者の検索・省覧の便を第一に考えて編纂された「類書」は、漢籍受容に際しての簡便かつ実用的な書である。日本においても早く『日本

国見在書目録』（九世紀後半成立）に『藝文類聚』や『初学記』をはじめいくつかの中国の類書名が見られるほか、それらの類書を通しての漢籍受容の形跡が『万葉集』などにすでに認められることから、中国文化受容に際して類書が重要な役割を果たしていたことは明らかである。一方ではまた、「和製類書」という呼称のある邦人撰の類書も早くから作られていた。『幼学指南鈔』に先立つものとしては天長八年（八三一）に滋野貞主らによって奉勅撰述された『秘府略』があり、現存するのは巻第八六四（お茶の水図書館成實堂文庫蔵）と巻第八六八（尊経閣文庫蔵）のわずかに二巻のみ（いずれも『続群書類従』に収録）であるが、もともとは一千巻から成る浩瀚な類書であった。なお中国にも大部の類書『太平御覧』（一千巻）があるが、『秘府略』に約百五十年ほど後れた、宋代の編纂である。しかしながら『秘府略』も『太平御覧』と同様に、選者が直接多くの書物を渉猟して選定、編纂したわけではなく、多くは先行する類書類（前掲の『初学記』『藝文類聚』等）からの、さらなる引用であったと考えられている。

『幼学指南鈔』は、現在故宮博物院蔵の巻十七の途中に「久安三年二月一日 大江時房」という墨書があること、また各冊末に所蔵者であったとおぼしき「覚瑜」の墨書が見られ、覚瑜の活動時期が承元四年（一二一〇）頃と推定されることから、その成立時期は平安末期であろうと比定されている。また前述のごとくその一部を佚してしまっているが、陽明文庫には『幼学指南鈔』古抄本の一部（巻十五、巻十八残葉）のほかに『幼学指南目録』（近世中期写、近衛家熙の筆であろうとされている）と題する

一冊が存し、目録記載の部類によって本書の原貌を窺うことができるのである。なお故宮博物院には巻十七のほか巻三、四、九、十三、十四、十八、三十（一部欠あり）を蔵するが、これらはいずれも明治十七年に楊守敬氏が彼土に持ち渡ったものであり、楊氏の『日本訪書志』にその記述が見られる。その他の所蔵は、大東急記念文庫蔵（巻二、五、十九、二十三、二十五、二十七）、東京国立博物館蔵（梅沢記念館旧蔵、巻十六）、お茶の水図書館成實堂文庫蔵（巻八、巻二十八）となっている。

『幼学指南目録』で明らかになる全体の部類・篇目が『藝文類聚』によく一致すること、また本文同士の対照などから、『幼学指南鈔』もやはり『藝文類聚』『初学記』『事類賦』といった先行の中国類書からの引用の多いことが明らかにされている。だが中には現存の書と一致しない記述も見られ、その依拠したところとしてすでに佚した別の類書の存在も考えるのである。

また本書の成立の背景についてもなお明らかではない。しかしながら、その名の見える大江時房が日付の久安三年（一一四七）にはわずか七歳の幼少であることから、幼学書として時房に与えられたものだったのではないかという推測も示されている。類書がその性格上初学入門書としての役割を果たすであろうことは容易に想像でき、また全三十巻という分量からすれば（もちろん検索の便も考慮されてはいようが）、「よむ」ことも十分可能だったであろう。

『幼学指南鈔』とほぼ同時代の成立と考えられるものに『文鳳抄』『管蠡抄』などがある。『文鳳抄』（十巻）、『管蠡抄』（八巻）はいずれも菅原為長（一一五八～一二四六）の撰であり、先立つ『秘府略』や『幼学指南鈔』がすべて漢文であるのに対し、『文鳳抄』は片仮名混じりの訓読体になっている。また『幼学指南鈔』はどこかに秘蔵されていたためであろうか、古目録類にもほとんど名が見えず、実際に使われていた形跡も認められないのに対し、『管蠡抄』につい

ては、『徒然草』に見られる漢籍引用の記述には、直接は本書に基づくものがあるのではないかとする指摘がある。さらに近世に至ると『管蠡抄』は『博覧古言』と改題出版されて版を重ねており、よく利用されていたことが窺われる。

なお『文鳳抄』に関しては、本図書館貴重書庫に「文鳳抄之類歟」との外題を付す巻紙があり、真福寺本『文鳳抄』影印（勉誠社刊）の解説において川口久雄氏は、未見であるとしながらその存在に言及されているが、今回『文鳳抄』本文と照らし合わせてみたところ、全く別のものであると確認できたことを付け加えておく。

中世以降の注目すべき類書、幼学書として取り上げられるべきものは少なくないが、〈中国文化の受容〉における類書の役割といったことを考える上で興味深い例を呈しているのは、中国文化の受容層が一般にまで広まった近世以降ではないだろうか。近世に入ると清代に編纂された『淵鑑類函』のような大部の類書が流入し、また中国類書の和刻本も多く作られるようになった。一方で和製類書や幼学書は、もっぱら金言名言ばかりを集めたもの、或いは人物に関する故事を集めるもの、または説話集のような形をとるものと、細分化して数多く生みだされていった。故事や説話を集めたものを類書とみなせるかどうかについては議論があろうが、例えば「忠臣」「孝行」などで部類し、その中で話のひとつひとつに標題をつける、という形だけを見れば、類書の「人」部のみを取り出して増補していったものと解することも可能であろう。

そのような、故事を集めた類書をさらに分かりやすくしたものに、説明文に絵を添えているものがある（絵入りの類書は中国に多く先例がある）。そのひとつに貞享五年（一六八八）の序をもつ『絵本宝鑑』という書があり、有名な許由の故事（堯帝が許由の人格に感じて天下を譲ろうと言ったところ、許由は汚らわしいことを聞いたとして水で耳を洗い、潁水のほとりに

隠居した)を収めるのだが、なぜか絵には岩の上から流れ落ちる「瀧」に手をかざして耳を洗おうとする許由が描かれ、和文でも「潁川の瀧に耳をぞ洗ひける」と説明されている(写真参照)、『藝文類聚』で関連箇所を見るかぎりでは「池水に臨みて耳を洗ふ」、あるいは「清冷の水に遇ひて其の耳を洗ふ」としかなく、これだけでも「絵」という視覚的なものに置き換える際の作為が感じられておもしろいが、そのみでな

く、近世和製類書について研究をされている神谷勝広氏によれば、近松門左衛門の作品『信州川中島合戦』(享保六年、一七二一)の中には「聞たるみゝのけがれを、此瀧にあらひしがふしぎ成か・昔の巢父許由にもあらず」と、この書の記述に拠ったとおぼしき文章が見られるという(その他数例の対応箇所が挙げられている)。

以上のような例はかなり極端なものであろうが、儒学者や専門の漢詩人はひとまずおくとし



「絵本宝鑑」(京大附属図書館所蔵) 請求記号 8-44工31

て、それ以外の人々が皆直接経書や史書を目にしていたとは考えがたく、やはりそこには簡便かつ明解な「類書」という媒介が存在していたはずである。そしてそうした類書の記述は、それが漢文から漢文訓読体、和文体さらには絵解きへと形をかえて原典からはなれてゆくことによって(これらが一直線上にあるわけではないが)、僅かな違いや、あるいは曲解といったものを含みやすくなるのではないだろうか。

日本文学における中国文学の影響を考えるにあたっては、現在ある辞書や索引類にたよって「原典」との比較にとらわれがちであるが、その間に存在した「類書」との関わりについても、さらに注目されるべきであろう。

〈主要参考文献〉

- ・山崎誠『「幼学指南鈔」小考』(研究叢書131『中世学問史の基底と展開』所収 一九九三年、和泉書院)
 - ・片山晴賢『「幼学指南抄」攷』(『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』所収 一九九六年、汲古書院)
 - ・飯田瑞穂『「秘府略」に関する考察』(飯田瑞穂著作集3『古代史籍の研究 中』所収 二〇〇〇年、吉川弘文館)
 - ・本間洋一『「事類賦」と平安末期邦人編類書』(『和漢比較文学』第三号 一九八六年十一月)
 - ・村上美登志『「中世軍記物語と和製類書—『曾我物語』を中心に—』(『和漢比較文学叢書第十五巻『軍記と漢文学』所収 一九九七年、汲古書院)
 - ・村上美登志『「徒然草」と類書』(『国文学 解釈と鑑賞』一九九七年十一月)
 - ・神谷勝広『「近世文学と和製類書」』(近世文学研究叢書11 一九九九年、若草書房)
 - ・湯橋俊子『「日本における中国『類書』の受容」』(『國學院大學栃木短期大学紀要』第二十号 一九八五年)
- (なかじま たかな)